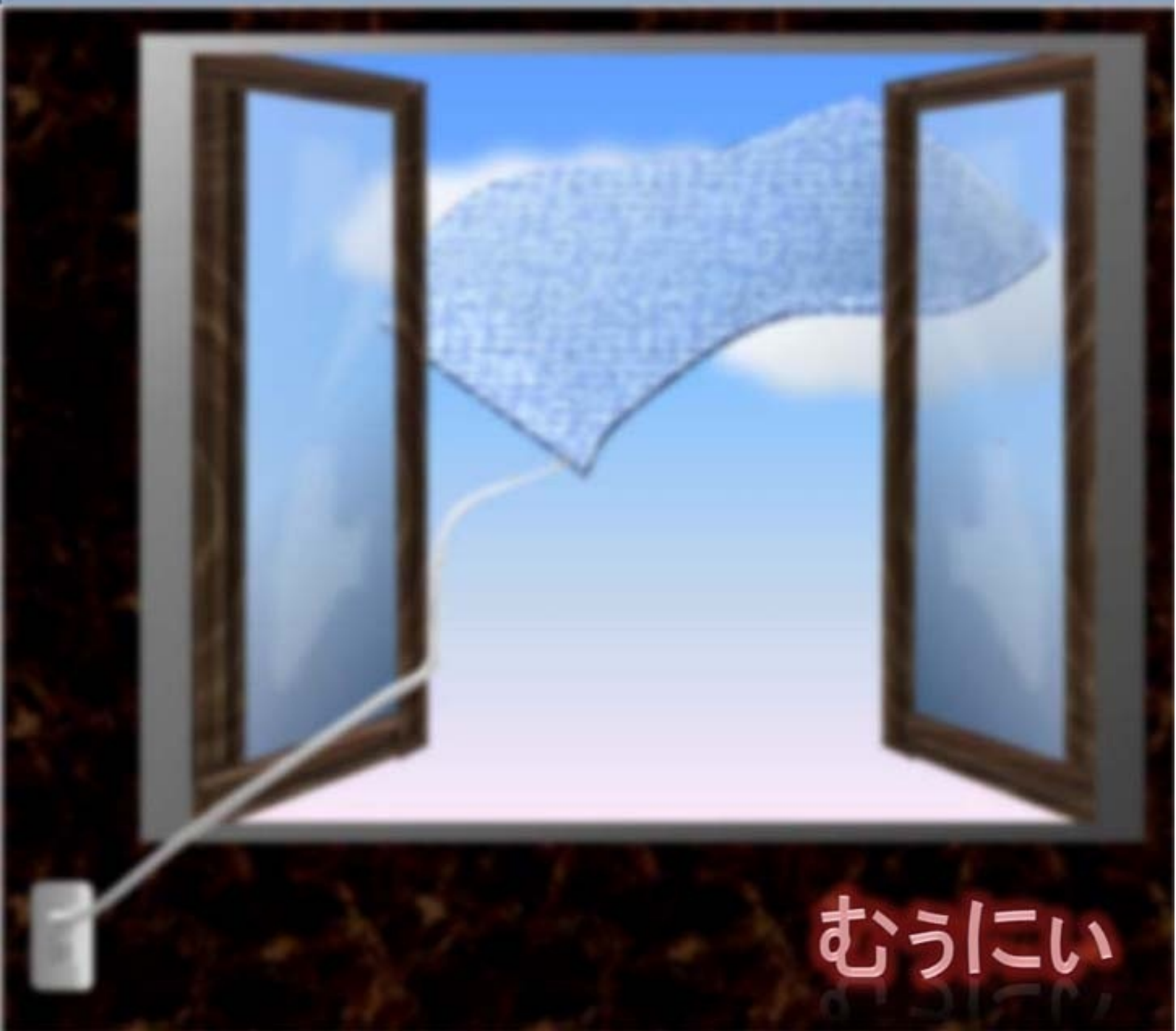
週刊 夢の窓 No.13



むうにい

西部の酒場で

　ここは荒野の閑散とした町にある、小さな酒場。
　友人の桑田孝夫と並んで、止まり木に足を載せている。
「スコッチ」桑田がオーダーする。マスターは、黙ってグラスに酒を注ぎ、カウンターにたんっと置いた。
「えーと、何にしようかな」メニューはないかと、わたしは店の中を見回す。残念ながら、それらしいものはなかった。

　カウンターの上を、ツーッとグラスが滑ってくる。
「こいつを飲んでみな、うまいぞ」隅の席から男が声を掛けてきた。「ワイルドターキーだ」
「ありがとう」わたしは礼を言って手を伸ばした。
　けれど、つかみ損ねたグラスは、そのまま反対側まで走っていって、床の上で砕け散る。
「……下手くそ」ぼそっとつぶやく声が聞こえた。

　マスターが新しいグラスを、わたしの前に置いてくれる。
「あちらのお客様からです」
　わたしは男にぺこりと頭を下げた。
「重ね重ね、すいません」
「よかったな、むぅにぃ。只酒ほど旨いものはないぞ」桑田が、ちょっとうらやましそうな顔をする。
　ワイルドターキーは、確かに口当たりがよかった。
「でも、炭酸で割ったら、もっとおいしいかも」わたしは言った。

　また、こちらに向かって飲み物が移動してくる。
「こいつで割ってみるといい。クセになるぜ」さっきの男だった。
　今度は、桑田がキャッチする。「また、落っことされちゃかなわねえからな」
　缶入りドクター・ペッパーだ。
「ドクター・ペッパーって、いかにも薬臭いんだよね」とわたし。これで割ったら、いったいどんな味になるのやら。
「せっかくだから、試してみろよ。案外、旨いかもだぜ」人事だと思って、桑田はそんなことを言う。

「じゃあ、この１杯だけ……」わたしは、ワイルドターキーにドクター・ペッパーを注いだ。
　１口飲んで、思わず、感嘆の声が漏れた。
「うまい？」桑田が興味しんしんな様子で聞いてくる。
「うん、ちょっぴり消毒液みたいな臭いがするけど、味はフルーティだよ」
「どれ、おれにも飲ませてみっ」そう言うと、わたしのドクター・ターキーをごくん、と飲む。喉の奥で、「んっ！」と唸って、そのまま最後までグラスを傾けてしまう。
「あー、もう！　全部飲むことないじゃんっ」
　向こう端の男は、そんなわたし達の様子を愉快そうに眺めているのだった。

　その後も、わたしと桑田、そして隅の男の３人で飲み続ける。
　桑田も男もザルらしく、いくら飲んでも変わらない。一方、わたしはそろそろ限界を感じていた。家に帰って、横になりたい。
「じゃっ、帰るからぁっ」わたしは出口に向かって歩きだす。
「どこへ行くつもりだ。もう、馬車はとっくに終わってるぞ」桑田が引き留める。「それにお前。そんなに酔っぱらってちゃ、どこ向かって歩いてるかもわからねえじゃねえか」
「酔ってなんか、ないよぉ～？　だからぁ、酔ってませんって」我ながら、どの口がそう言うか、と呆れる。

「なあ、お連れさん」隅の男が桑田に言う。「隣町まで、ほんの２、３キロばかりだ。送っていってやっちゃどうだい。酔い覚ましにちょうどよかろうよ」
「あ、そうっすね。そうします。このばか、ほっといたらそのままグランド・キャニオンまで歩いて行っちまいそうだし」
　わたし達はマスターと隅の男に別れを告げ、店を出た。

　月と星明かりだけが頼りの荒れ地を、２人してのんびり歩く。
　風が気持ちいい。いつの間にか鼻歌が出ていた。
「ふんふーん、ふふーん、ふんふーん、ふーん……」
「おっ、『ブルー・ムーン』か」桑田が懐かしそうに言う。「それ聞くとよぉ、『狼男アメリカン』つう映画を思い出しちまうんだ。その曲が印象的に使われててな」

「この辺りにも出ると思う？　狼男」わたしはちょっとだけ怖くなる。
「いや、いないだろ？　あいつら、今じゃ絶滅危惧種だしな」
「そっか。なら、安心だね」
　わたしはまた、「ブルー・ムーン」を口ずさむ。

　ずっと先の方に、隣町の明かりが見えてきた。

天かける大橋

　日本道路公団とＮＡＳＡが共同事業を始める、という大ニュースが世界中を駆け巡った。
　道路公団の代表がテレビのインタビューで答える。
「宇宙だけを見上げるＮＡＳＡ、そして地べたばっかり見てきた我が道路公団が、夢のタッグを組みます！」
　誰だろう、こんな安っぽいコピーを思いついたのは。まるで、チーズとかまぼこの合体商品のＣＭみたいだ、とわたしは思った。

「この地球は、人類にとってすでに手狭になりました。我々は、宇宙進出に本格的な目を向けなくてはなりません。その足掛かりとして、まずは天の川に橋を建設することを決定しました」
　えーっ！？

　スマホを引っつかむと、友人に掛けた。
「あ、桑田？　ねえねえ、ニュース観た？　日米共同で、天の川に橋を作るんだって」わたしは一気にまくしたてる。
「落ち着けって。おれも観てたよ。にしても、すげぇな。天の川だぜ、天の川！　距離にして、いったい、どれくらいあるんだろな」
「世界最大の橋って事だよね」わたしの興奮はまだ収まらない。
「ばか、宇宙規模の話だろうがっ」

　さっそく、調査隊が天の川を訪れ、現地の視察を始めた。土台はしっかりしているか、流星の通り道になってはいないかなど、こと細かく調べられる。
　何しろ、この先数億年もの間、天の川のあっちとこっちとを結ぶ、大切な役割を担うのだ。

　調査内容は、同行したＮＨＫの取材班によって、逐一地球へと送られてくる。
「現在のところ、天の川周辺に活断層は見当たらないとのことです」と宇宙服姿のレポーター。
「活断層って、宇宙にもあるもんなの？」わたしはスマホ越しに聞く。
「さあ。ま、何にしても、土台は頑丈じゃないとな」

「この一大プロジェクトをどう思っているのか、現地の方にお話をうかがってみました……」レポーターは、織り姫にマイクを向けた。
「橋が架かるって聞いたときは、嬉しくって、思わず小躍りしちゃった」
「完成したら、年に１度どころか、毎日でも彦星と会えますね」とレポーター。
「ええ、ＮＡＳＡと道路公団の皆さんには、ほんと感謝します。うちのパパは怒るかもだけど、もう歳なんだし、いい加減、昔のことは星に流して欲しいわ」
「『星に流す』というのは、地球で言う『水に流す』ということでよろしいですか？」
「はい」織り姫はにっこりと答える。

「ところで、七夕の行事はどうなります？　７月７日は、もう特別な日でも何でもなくなるわけで、廃止でしょうか」
「うーん……。ずうっと続けてきた年中行事だし、記念日として残していきたいわ。その件に関しては、今後、彦星と相談して決めるつもり」
「じゃあ、最後になりますが、地球の人たちに何かメッセージがあれば、どうぞ」
　織り姫は、こほんっと軽く咳払いをすると、
「みんなー、短冊に願い事は書いたーっ？　たぶん、叶わないと思うけれど、もしかしたらってこともあるでしょ？　とりあえず、書いとくといいよーっ。てへっ、ぺろ……」

ふうがわりなサイン会

　友達の志茂田ともるは、ああ見えてけっこう、ミーハーだ。
「どうか、お願いしますよ、むぅにぃ君。今度の日曜、休出になってしまいましてね、代わりにサイン会へ行っていただけないでしょうか」
「サイン会って、誰の？」わたしは聞いた。
「しょこたんと二宮君のに決まってるじゃあ、ありませんか」まるで当然のように言う。
「二宮金次郎？」ちょっとからかってみた。
「ばかなことを言わないでいただきましょう」いつもは冷静なくせに、趣味の話となるとこうだ。

「ごめん、わかってるって。嵐の二宮和也でしょ？　それにしても、へんてこりんな取り合わせだよね、このサイン会って」
「そうでしょうか？　あの２人こそ、お似合いじゃありませんか、むぅにぃ君」心の底からそう思っているらしい。
「で、どこなの、その会場は？」
「後楽園ですよ。入場すれば、具体的な場所まで案内してもらえますから」

　そんなわけで、後楽園にやって来た。
「あの、中川翔子のサイン会って、どちらですか？」受け付けで尋ねる。
「はい、それでしたら、あちらのお化け屋敷でございます」
「えっ？　お化け屋敷なんかでやるんですか」思わず聞き返してしまった。
「はい、入場券をお買い求めの上、お入りください」
　やだなぁ。子供の頃から苦手なんだけど……。

　それでも、入るより仕方がない。真っ白なままの色紙なんて持って帰ったら、志茂田にどれだけ叱られるかわからない。

　チケット代600円を払い、わたしはお化け屋敷へと入っていった。入り口からして、すでに真っ暗。ヒュ～ドロドロ～、っとお馴染みの効果音が5.1chで鳴り響く。
「人をおどかす商売なんて、絶対、ろくなもんじゃない」つい、ブツブツと洩らしてしまう。「さっさとサインをもらって帰ろう」
　バンッ！　と廊下の壁がどんでん返しになって、いきなりゾンビが現れた。
「はいーっ？！」脊椎反射で後ろに飛びすさる。明らかに作り物とわかる出来の悪いゾンビだったけれど、薄暗い中、緑色の照明の下で対面してみれば、その効果は絶大だった。

　わたしは涙目のまま、さらに進んでいく。
（何も現れませんように、何も現れませんようにっ）心の中で唱えるが、仮にもお化け屋敷である。何も出なかったら、それこそ客からクレームが来る。
　墓場へやって来た。ＬＥＤの火の玉がふらふらと舞っている。卒塔婆の陰からは、片目の腫れ上がった白い服の女が、しきりに「おいで、おいで」と手招きをする。

　その傍らを、わたしは唾を飲み込んで通り過ぎる。さっきのゾンビで多少の免疫が付いたようだ。
　ふいに扉の前へと出る。何の変哲もない、ステンレスの取っ手が付いていた。プレートには「事務室」とだけ書いてある。
「スタッフ・ルームかな。でも、１本道だったはずだし」
　取っ手を回すと、ドアがすっと開いた。蛍光灯の光がまぶしい。

「失礼します……」声を掛けて、中へと入る。
　スチール製の机とイスが置いてあるきりで、人影はなかった。まさか、ここが終着なのだろうか。

　その時、どこからともなく気味の悪い声が聞こえてきた。
「……ギザ……ギザ……」
「誰っ？！　どこっ？」言い知れぬ恐怖がわたしを包み込む。机の下に隠れているのかと覗いてみるが、何も見当たらない。
「ギザ……ギザ……」
　上かっ！　わたしは天井を見上げた。
　ヤモリのように貼り付いたしょこたんが、こちらを見てニタリと笑う。「トゥットゥル～ッ！」

「きゃあああっ！」
　色紙どころか、頭の中まで真っ白になったわたしは、出口に向かって、一目散に逃げ出していた。

蚤の管弦楽

　南極で、世界最小の楽譜が発見された。サンプリングした氷を分析していたところ、米粒大の印刷物が複数、確認されたのだという。
　全て集めて、ページ順に並べてみると、驚いたことにオーケストラのスコアであることが判明したのだ。

　スコアは音楽アカデミーに送られ、研究者らが日夜、虫眼鏡片手に調査を続けた。
　作曲者はモーリス・ラヴェルで、タイトルは「ニッカーボッカー」。どうやら、「ボレロ」とのペア曲だったらしい。総譜50段もの大編成である。
　コーダには小さく日付も書かれ、そこから1937年12月20日に完成したことが明らかとなった。

　クラシック協会主催のもと、この曲の演奏会が開かれることに。
　しかし、問題が１つあった。
「こんな小さな楽譜など、いったい誰が演奏できるのだ？」
「やはり、なりの小さな演奏家でないと不可能ではないか」
「そんな小さな演奏家など、果たして見つけることができるのか」

　世界は広いものである。ついに、「ニッカーボッカー」の演奏にうってつけのオーケストラが見つかった。
　蚤達が奏でる、その名も「蚤の楽団」だ。
「我が『蚤の楽団』こそ、この曲にふさわしい。ラヴェルの最後の作品、極上の演奏で披露させていただきましょう」楽団長は胸を張る。

　初演は、池袋演芸場に決まった。普段はイス席なのだが、今回の演奏会に合わせて、枡席へと並べ換えてある。何しろ、目を凝らさなくては見えないほどの楽団だ。イスの上から見下ろしたのでは、話にならない。

　歴史的な演奏会を見逃すまいと、わたしは池袋に駆けつけた。
「ボレロが前編、ニッカーボッカーが後編ってことでいいのかな。きっと、リズムが特徴的な管弦楽曲なんだろうなぁ」わたしは最前席にどっかりと座り込んで、演奏が始まるのを今や遅しと待ちわびていた。

　燕尾服姿の指揮者が、袖からかしこまって現れる。
　その後ろからは、お盆を持った黒子がついてきた。黒子は、お盆を舞台の中央にそっと置くと、すごすごと引き下がっていく。
　どうやらのあのお盆に蚤の楽団達が載っているようだ。

　わたしは目を細めて、お盆の上をじっと見つめる。他の客達も、背や首を伸ばして、一目、その姿を捉えようと躍起だ。
　よく見ると、たしかに黒い芥子粒のようなものが集まっているのがわかる。前の席に座っているわたしでさえこうなのだから、後ろの者は虫眼鏡つきのオペラグラスでもなければ無理だろうなぁ。

　指揮者が客席に向かって一礼をする。いよいよ、演奏の始まりだ。
　お盆に向き直り、さっとタクトを振り上げる。
　かすかに聞こえた。まるで、蚊の鳴くような音が。もっとも、演奏者は蚊ではなく、蚤だったけれど。
「ちっとも聞こえねーぞっ！」あちこちから罵声が飛ぶ。
「ほんとにそこにいるのかっ？」
　考えてみれば、当然の顛末である。主催者も、もうちょっと工夫すればよかったのに。

　指揮者はそんな野次などお構いなく、さっそうと演奏を続ける。時には力強く、また時には繊細に、喧噪で音こそ聞こえなかったが、さぞや素晴らしい曲なんだろうな、とわたしは想像を巡らせた。
　ふいに指揮棒がぴたっと止まる。休符だろうか。いや、それにしてはばかに間が長い。

　指揮者は困惑した顔でこちらを振り返った。
「たった今、わたしどもの楽員は、お客様の鼻息で１匹残らず、吹き飛んでしまいました」

自動販売機として生きる

　わたしは自動販売機としての人生を送っていた。缶飲料だけでなく、その土地、その季節に合わせて、とにかくなんでも売る。

　そんなわたしを、他の自販機は邪道だと批判する。
「なんでも売ればいいってもんじゃないよな」清涼飲料水の自販機が聞こえよがしに言う。
「ああ、節操がないな、あいつ」鼻息粗く煙を吐くのは、タバコの自販機だ。「しかも、他の連中が120円で缶コーヒーを小売りしてるっていうのに、100円で横流ししてるもんな。あ、タバコは20歳になってからな、一応」
　うんうん、と勢いよくうなずくのはビールの自販機。
「そんなに金が欲しいのかなぁ。ガツガツ稼いだって、所詮は自販機だろ？　困った奴だよ……未成年者は、アルコールお断りだよ」

　そんなわたしでも、温かく見守ってくれる先輩達がいくらかいた。
　場末にぽつんと置かれた、怪しげなアイテムの販売機や、廃れたドライブインで忘れられたように佇む、そばやハンバーガーの機械達だ。
「なあ、むぅにぃよ。わしらは、売ってなんぼの商売じゃ。誰かが何かを欲しがる。それを売るわしらがいる。つまり、それだけのことなんじゃ」ディスプレイの中で、微妙な再現度のフィギアが揺れる。
「そうよ。あたしのふにゃふにゃハンバーガーだって、『一部、ビスケットみたいに固いけど、それがいい！』って、喜んでくれる人がいるもの。その人達がいる限り、あたしは現役でいたいなあ」

　わたしもいつか、先輩達のように、自信を持って仕事ができるようになりたい。
　少なくとも、今はまだ、未熟な自動販売機のむぅにぃなのだった。売るにしても、接客にしても。

　先日も、気に入らない客が飲み物を買いに来たので、つい邪険にしてしまった。
「なんでえ、ドクター・ペッパーねえのかよ。ちっ、ペプシで我慢してやっか」
　ドクター・ペッパーのようなマイノリティな商品を置いてしまうと、他の売れ筋が減ってしまう。それに、ペプシで我慢とは、失礼しちゃうな。
　わたしはペプシを「ホット」にして売ってやった。
「ペプシ、ペプシ……っと。あぢっ、あぢぢっ？！」冷たいペプシのはずが、思いがけず熱かったので悪態をつく。「ば、ばかやろーっ。もう２度と、お前みたいな自販機じゃ買わねえぞ！」
　カッとなると、すぐやらかしてしまう。でも、後悔はしていない。

　ある時、小学生の兄妹がやって来た。
「ああん、お兄ちゃん、お兄ちゃん。間違って、苦いコーヒー押しちゃった」今にも泣きだしそうに妹が言う。
「えー、ほんとはどれ押すつもりだったの？」かがみ込んで聞く兄。
「うんとね、５回振って飲むやつ。プリンのジュース」
「そっか、おまえ、好きだもんな、あれ」兄はにっこり笑うと、プリンシェイクを買って、妹に渡すのだった。自分はブラック・コーヒーを黙って受け取る。

　だから子供って腹が立つ。よく見もせずに商品のボタンを押し、おまけに泣けばいいと思っている。
　兄も兄だ。何も、自分が飲むお金で買ってやることもないのに。第一、そのコーヒーを本当に飲むつもりなのか。子供にはいくら何でも早すぎる。

　普段は絶対に当てないデジタル・ルーレットを、わたしは全部「７」に揃えてやった。
「えっ？！」兄は口をぽかんと開けて数字を見つめる。「あ、当たっちゃった。当たっちゃったよ」
　今度こそ、欲しい飲み物を買うといい。まったく、むかつく。

　わたしの目標は、「いつか、自販機王になるっ！」こと。
　でも、今はまだ駆け出しの半端者だ。

干物男を発見する

　公園の木陰でソフトクリームを食べていると、ツーッと大きなクモがぶら下がってきた。
「ふふっ、クモなんかに驚くものか」内心、ドキッとしたが、どうにか持ちこたえる。
　ふうっと息を吹いて揺らしてやると、慌てたように糸をたぐって逃げていった。
「そう言えば、ここしばらく志茂田を見てないなぁ」
　友人の志茂田ともるは、手足がひょろっと長く、面と向かっては言えないが、クモにそっくりだ。
　家もそう遠くないことだし、ちょっとのぞいてこようかな。

　玄関のチャイムを鳴らす。しばらく待つが、出てくる様子がない。
「留守かな」わたしはポケットから携帯を取り出すと、志茂田に掛けてみた。
「……はい」志茂田が出た。なんだか、力のない声だった。
「今、どこにいるの？」わたしは尋ねる。
「どこって、家にいますとも、むぅにぃ君」
「えー、チャイム鳴らしたんだけど」わたしは文句を言った。
「聞こえていましたよ。あれは君でしたか」と志茂田。「大変に申し訳ないのですが、上がって部屋まで来てもらえませんか。玄関の鍵は開いていますから」
　どういうことだろうと首を傾げながら、わたしは家に入った。

　ベッドで仰向けに横たわった志茂田が、弱々しく手を振る。
「やあ、よく来てくれました、むぅにぃ君」すっかり干からびていて、見る影もない。
「どうしたの、その体っ？！」びっくりして駆け寄る。
「このところ太り気味だったので、思い切ってダイエットに挑戦してみたのですよ。いささか無理をしすぎてしまい、ご覧の通り、すっかり脱水症に」
「脱水症なんてもんじゃないよ、まるで、ミイラじゃん」思わず取ったその手は、カサカサとしていて、今にもボロッと崩れてしまいそうだ。なんとなく、カツオ節の香りが漂う。

「とにかく、水を飲まなくちゃっ」わたしはキッチンへ行って、冷蔵庫からペット・ボトル入り麦茶を持ってきた。
「すいませんねえ」ペット・ボトルをラッパ飲みしながら、志茂田は言う。「なんと言いますか、わたしは掛け値なしの『干物男』ですねえ、あっはっはっ」
　水分を補給するにつれ、だんだんと張り艶が出てきた。
「これだけじゃ、全然足らないね。ちょっと、飲み物を買ってくるから」わたしは小走りで、近所のスーパーまで買いに行く。

　水や麦茶ばかりじゃ栄養にもならないな、と考え、トマト・ジュースとオレンジ・ジュース、それにドクター・ペッパーを買った。

「ただいまぁ」さっそく、トマト・ジュースを志茂田に飲ませてやる。
　ごくごくと喉を鳴らしながら、息継ぎのついでにぼそっと言う。「こんなときに何ですが、実はわたし、トマト・ジュースはあまり得意ではないのですよ」
　わたしは聞こえないふりをして、構わず飲ませ続けた。
　よっぽど水気が抜けていたのだろう、志茂田の肌はトマト色に染まってきた。さっきよりは、断然、健康的に見える。
「リコピンはお肌にいいんだよ」わたしは声を掛けた。

　続いて、オレンジ・ジュースを飲ませる。こちらは嫌いじゃなかったらしく、積極的に飲んでいく。
「ぷはあっ、オレンジ・ジュースはやはりいいですねぇ。生き返った気分ですよ」
　黄色くなった顔でにこにこと笑う。体もだいぶ膨らんできて、もうほとんど、以前の姿を取り戻していた。

「ドクター・ペッパーも買ってきたけど、さすがにもう入らないよね？」わたしは500ml入りをレジ袋から出して見せた。
「もちろん、いただきますとも。ドクター・ペッパーこそ、我が命の水ですからね」
　そういうと、ひったくるようにして飲み出すのだった。
　見る見る体の色が変わっていく。どす黒い風船そっくりだ。
「針で突いたら、ミックス・ジュースが吹き出してきそう……」率直な意見を口にするわたし。
「あはは、そうかもしれませんねえ。これに懲りて、もう無理なダイエットはやめにしますよ、むぅにぃ君」

清涼飲料水の甘ーい香りが、部屋いっぱいに広がっていた。

通勤ハンバーグ

　新宿で乗り換えようとすると、どういうわけだか、必ず迷子になる。埼京線乗り場を探し求め、さっきから３時間も構内をうろついていた。
「あの、どなたか埼京線のホームがどこかご存じありませんかぁ」忙しそうに行き交う人に、そう声を掛けてみる。
「さあねえ、どこだったっけかなあ」
「見たことあるよ。あれは確か、10年ほど前の雪の日だったよ」
　なんてわかりにくい駅なんだろう。

　あてどもなくさまよい歩き、ようやくそれらしい電車に乗ることができた。
「ああ、よかった。これでやっと帰れる」わたしはほっと胸をなで下ろす。
　それにしても混んでいる。背の低いわたしは、爪先立って、吊革につかまらなくてはならない。けれど、押し合い、へし合い、たちまちバランスを崩してしまうのだ。その度にまたうーっと背伸びをして、吊革にぶら下がる。

　駅で停まるたび、降りた客の倍、またどっと乗り込んでくる。ただでさえいっぱいなのに、ぎゅうぎゅうと、押しくらまんじゅう状態である。
「埼京線って、いつも満員だからやだなぁ。しかも、こんなに蒸し暑いのに、冷房なしだなんて」思わず洩らしたわたしのつぶやきに、誰かが答える。
「埼京線？　ああ、それなら乗る電車を間違えましたな。これは最凶線ですよ」
　ああ、やっぱり！　どうりで最悪だと思った。

　あんまり揉みくちゃにされているものだから、頭の中は「手ごねハンバーグ」のことでいっぱいだ。
　ファミレスで食べた、ハンバーグのセットがおいしかったなぁ。ソースはデミグラで、ナイフで切り分けると、じわっと肉汁が染み出てくる。

　残念ながら、今度は自分がハンバーグになる運命らしい。今までは食べる側だったけれど、とうとう食べられる番か。
「あなた、あきらめちゃダメよ。意志を強く持つの。いい？　絶対にハンバーグになんかなっちゃダメだからねっ」そう励ます声がする。
「そうだぞ。頑張れっ。君の人生はハンバーグになることだったのか？　いや、断じて違うぞっ！」
「ハンバーグになんてなるもんじゃない。食べられて、それっきりだぜ」
　身動き１つできない中、周囲の人々がわたしを応援してくれた。

　どうにか耐えようともがいたが、あっからもこっちからも揉まれ続けて、わたしはついにあきらめる。
　お尻の辺りからハンバーグになっていくのがわかる。やがて、腿やふくらはぎへと広がり、あっという間に全身が手ごねハンバーグになってしまうのだ。

　わたしは車内にいる人たちに向かって、最後の願いを請う。
「どうか、ファスト・フードなんかには卸さないで下さい。びっくりドンキーとか……せめて、ロイヤルホストへ……」
　今まで食べてきたハンバーグ達も、こんな気持ちだったのかなぁ。薄れゆく意識の中、わたしはぼんやりとそう考えていた。

週刊　夢の窓　No.13

http://p.booklog.jp/book/88031

著者：mueny
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/mueny/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/88031

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88031

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ